

Q&A 10問10答

- Q1** 自分の性格をひとりでいい表す？
優柔不断
- Q2** 弱点を1つ教えてください。
人とのコミュニケーションが苦手
- Q3** 最近うれしかったことは？
緩和ケアでピースサインした患者の笑顔
- Q4** 今はまっているものはありますか？
ありません
- Q5** タイムマシンがあったら行きたいのか過去？ 未来？ その理由は？
今だけで十分です
- Q6** 人生で最も影響を受けた人は？
岡田玲一郎さん。患者さんの都合で考えるなど、必要なことを教わりました
- Q7** 日課はありますか？
ありません
- Q8** 人生最後に食べたいものは？
塩おにぎり
- Q9** 今一番会いたい人は誰ですか？
ありません
- Q10** 病院トップとしてふさわしい素養は？
コミュニケーション能力

●医療法人谷田会 谷田病院



一人ひとりの大切な時間に寄り添い まちづくりにも注力

熊本県上益城郡甲佐町にある99床のケアミックス病院。2018年、甲佐町、甲佐町商工会等と街づくり協定を締結し、「まちの保健室」「まちかどカフェ」などに取り組む。社会的処方ができるコミュニティホスピタルをめざす。

“病院を変えるには自分自身が変わることが大切”



PROFILE

やつだ・りいちろう ● 1987年、北里大学医学部卒業後、同院放射線科入職。90年、熊本大学医学部附属病院。91年、荒尾市民病院等を経て、94年、谷田病院院長就任。

——以前からまちづくりに興味があったのですか。

谷田 40歳のころ、当院を継ぐために戻ってきました。ずっと大学病院などに勤務していたため、当院には医療の質や安全への取り組みが足りないと感じました。そこで、診断と治療に注力すると決めました。内科疾患に特化し、小児や高齢者の受け入れは限定。受診した人への責任を高めようという思いで取り組みました。

医療の質や安全は徐々に上がってきた一方で、地域の高齢化や職員不足などもあり、病院経営に伸

とは、人づき合いが苦手な私にはできないと思っていました。自分の限界を感じた時に、だれかがもつ力を活用することで、自身も成長できます。本当に大切なことに取り組むときは、苦手な人づき合いも克服できると実感しました。

——「まちづくり協定」の締結は、多くの病院が注目しています。

谷田 事務長から「古民家改修のミーティングが面白いので顔を出して」と言われたのが、まちづくりにかかわったきっかけです。ミーティングは、若者を中心に笑い声があふれる楽しいものでした。ミーティングは深刻なものだと思いついて、笑顔があるミーティングにびっくりしたんです。

び悩みを感じ始めました。高血圧、糖尿病などの慢性疾患や血管疾患等も、地域での発症率が良くなつたわけでもありません。外来に来る患者だけを対象に、同じ方法で進めてもだめだと気づき、新しい方法を求め始めました。

受診するのは町の人口の約2割で、あとの8割にどのように働きかけるかを始めました。患者の病気だけでなく、その人自体を支えるには、その人や家族、地域にかかわる必要があります。病院の成長は、医師がしたい医療ではなく、患者や家族が受けたい医療

ポジティブで元気なことは、病院にも良い影響があるんじゃないかと感じました。振り返ってみたら、私自身が職員に「深刻なことを抱えている人の前で笑うな」と言っていたんですよね。でも、笑顔や笑い声は、病院の一角にあってもいいなと思うようになりました。

病院を変えるには自分自身が変わらないといけないと思います。自分を変える辛さより、変わった後という気持ちと、変わった後に何か面白いことがありそうという気持ちのほうが大きいと思います。まちづくりに取り組み始めて、職員も変わりました。事務長とともにアイデアを出して、黒豆茶の販売や米づくりまで始めました。職員のアイデアは、できる限り認めています。資源の投入にはリス

クや経営者としての責任もありませんが、診断と治療以上の成績をめざそうとすると、地域とのかかわりは必要になると考えています。良いサービスを提供できると地域に喜ばれますし、職員の満足感にもつながります。さらに、地域医療のさまざまなプレイヤーと親しくなることで、さまざまなネットワークが広がることが地域の強みになると感じています。

クや経営者としての責任もありませんが、診断と治療以上の成績をめざそうとすると、地域とのかかわりは必要になると考えています。良いサービスを提供できると地域に喜ばれますし、職員の満足感にもつながります。さらに、地域医療のさまざまなプレイヤーと親しくなることで、さまざまなネットワークが広がることが地域の強みになると感じています。

近年は、緩和医療と総合診療医の取り組みを強化しています。医療職や介護職、家族みんなが意見を出し合い、終末期の患者を支えています。食事もとれず辛いはずの患者が、笑顔で家族とピースサインしている写真を職員に見せてもらいました。私はこんな医療をしたかったんだと、とてもうれし

くになりました。疾患ではなく、患者自身を支える取り組みが地域に広がっていると 생각합니다。今後は、コミュニティホスピタルや社会的処方の考え方が重要になります。困ったことがあったら、「谷田病院に相談するといいいね」という仕組みができるといいなと思います。

——約10年前に新しく事務長を迎え、病院の動きが変わりましたね。

谷田 病床転換のシミュレーションをする際、事務長から「自分だけで短期間で行うか、時間はかかるが職員を指導しながら行うか」を問われました。「職員を指導しながら」を選択したところ、数カ月後の職員の成長ぶりが著しかったのです。スイッチが入ったというか、この職員がいないと困るというくらいに変化しました。

事務長は、人の力を引き出すことができると可能性を感じました。人と人をつなぎ課題を解決するこ

トができてくると可能性を感じました。人と人をつなぎ課題を解決するこ